

目的、「被服構成学」或は「被服構成」が、大学或は短期大学における被服領域の教科名として登場してからすでに二十余年を経ている、その間、幾多の内容に関する研究も業績をあげ、また、各教育や研究の場においても種々な試みがなされたと考えられる。しかし、その研究対象を全領域への視野から論議されたことはなかったと考える、そこで被服学の諸領域の研究と被服構成学の相互核能的な関れんを享受しながらいくらかでも、体系的な被服構成論を試みようと考えた、今回は「研究対象」の課題を中心に述べ批判を得たいと思う。方法、被服学に関する教育観の夏遷をたどつこ  
なお、現在の課題を求めると同時に、被服構成学と被服技術の学として、その技術的・理論的の分枝をおこない多方向的な研究の位置づけを明らかにしようとしながら、領域全体への視座を確かにしようとした。結論、被服学の対象は人間の生活文化としての衣生活であると考えられるその意味は被服が、何らかの環境を生きのびようとする人間の知恵と技の所産であり、しかもそれは、「着る」という「狭小」な知恵であり技である。被服学も被服構成学もそうした狭小な文化的領域をその歴史とそれだけの社会の文脈に位置づけて理解しながら客観的、全体的な視野が<sup>必要に</sup>せまられると考えた。  
見たつこと